
いつも隣に腐男子

仙人掌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつも隣に腐男子

【Zコード】

Z2199G

【作者名】

仙人掌

【あらすじ】

とある2人の幼馴染の話。腐知識は攻めと受けがわかればOKです。というより腐要素そのものがほとんど皆無なので、誰でも読んで大丈夫だと思います、多分。

「なあなあ、今の一見たか？！」

「……あー、はいはい

私は今、幼馴染の男と喫茶カフュという名前のケーキ屋に来ている。
変な名前だけどいつの間にか常連になつてた。
まあそこはどうでもいいのだけど
今、私には悩みがある。

「やっぱ左側の少し釣り目の男の方が攻めかなあ？」

「はあ……」

「の男のせいです。

『いつも隣に腐男子』

この男、腐男子なんですよ。

別に同性愛者ではないけど、男×男のカップリングが好き。
女×女とでもいけるとか。

自分がその立場になるのは嫌だけど、好きらしい。
わけがわからない。

たまに私を妄想に使っているらしい。

この馬鹿男をどこかの山に埋めてやりたい。

しかし何の因果かこの男に惚れてしまっている私はもつと馬鹿か。

「や、むしろ右側の氣の弱そうな子が攻めもありだな・・・」

「はあ・・・」

ほんと何でコイツのことが好きなんだろ、私。

この男の何処に惚れる要素があるんだ。

コイツはこの喫茶店に来ては通行人をウォッチングして、妄想の材料にして楽しんでいる。

私は何故かそれに付き合っている。

そっち系の趣味の腐女子とやつてればいいのに。

・・・それはそれで嫌か。

「どかした? わたしから黙り込んでるけど」

「い、いや、ちょっと考え事してて・・・」

顔を近づけて覗き込むなこのアホおおお!
やばい、今顔赤い? 赤い?!

「・・・おまえなんか変だぞ?」

「だからなんでもないって……」

覚られるな、覚られるな。
ある意味覚つてもらいたいけど。
つてそひじやなくて！

「ははーん、わてはあつちの兄弟を使ってなんやら妄想してたな？」

「死ねー！」

「うわー!?」

気づいたときには、私の拳には生々しい人を殴った感触があった。

「おまつ・・・顔面グーはないだろー。」

はあ・・・本当にこいつはもつ・・・
あーイライラする。

甘いもの食べなきややつてけない。
とこ「！」と手元のケーキに手をつくる。

モグモグ

うん、美味しい。

「なあ」

「何？」

「おまえとB組の笹塚さんだつけ？中々いい組み合せだと思つん
だが・・・」

「キツ！バキイ！ズゴツ……グシャア……メメタア……ガキイツ
！……」

「ちょ・・・なん・・・か・・・悪い」と・・・言つた？俺・・・

「

「もうあんたなんか知るか！？」

その場から逃げるように立ち去る。

ほんとあの男・・・！

ひとの気持ちを知りもしないで。

「ちょっと待てよ！？」

「おい、ちゃんと金払え、食い逃げする氣が貴様」

「いや、それどうりじゃないんだつて！」

「シュークリーム×3、ショートショートケーキ×2、チョモラン
マ・モンブラン×2、柔らかすぎるクッキー×3、ダンデドーナツ
ツ×2、超高級ティラミス×2、聖マリア風チョコレートパフェ、
ロールケーキ型キヤノン、RIGURU蒸しパン×3、五月雨クレ
ープケーキ、ケーキ・オブ・ザ・トワイライト、スイートポテト・
ラグーン、カドケシ型ケーキ、コーヒー×2+おかわり8、まだあ

るが以下省略、しめて8280円だ

「あいつそんなに食つてたのかーー?」

「払え

「え、まじ?俺そんな持ち合わせが無いんだけ?・・・

「昨日バイトの給料日だったひ

「何で知つてんの?手か俺そんな金ねえんだけ?・・・だから
らあ、待つてつばあああああーーー。」

「まあそれはともかく、お前に話がある

「・・・え?」

遙か後方でなんか聞こえた気がするナビ気のせいか。
にしてもホントアイツむかつく。
そもそもあいつに惚れたのってこいつだけ?

「はあ・・・」

ため息が自然と出るほど陰鬱な気分で町を歩く。

世界から切り離されたかのよう、私の周りだけが暗い。
負のオーラを纏つたまま商店街をさらに歩く。

バレンタインデーも毎年アイツにだけに渡してゐる。
下駄箱や机に入っていた、他の女子のチラシやラブレターは全て焼
却炉に放り込んでいる。

以前に直接告白しようとした子は、あいつの悪ことじるを教えて幻滅させてやつた。

さりげなくアピールとかしてる。

これでも見た目にはかなり気を使つてる。
アイツの腐トークにだつてつきあつてし、そつち方面の勉強も一応してゐる。

けど中々努力の成果が見えない。

いつの間にか商店街を抜け、住宅街に入つていた。
結構な時間歩いたのか、日が傾き始めている。

子供達に帰りを促す親達の声が聞こえたので、少し顔を上げると久しぶりに見る光景があつた。

「あ・・・あの頃の公園だ」

そこは幼稚園児や小学生だった時に、あいつとよく遊んだ公園だつた。

懐かしい気持ちにひたりながら、公園の中をゆっくりと歩くとブランコが目に留まる。

ブランコなんて何年ぶりだる、と思いながら腰を下ろす。

キイ・・・キイ・・・キイ・・・

互いに同性の友達がいても離れることはなかつた。

一緒にゲーセン行つたり、買い物行つたり、映画見たり、勉強したり、メールしたり。

女の中では家族を抜かせば、あいつと一番一緒にいると思つ。

ケドそれってどうなんだろ？

やっぱり友達としか思われてないだろうか・・・

そこにいるのが当たり前の空氣みたいな存在？

「はあ・・・」

本日何度目になるかわからないため息をつく。
もう駄目なのかもしれない。

私には自分のことを、あいつに女として見せるのは無理かもしね
い。

あきらめでずっと「トモダチ」でいるしか・・・

「帰ろ・・・」

田はもう完全に落ちたようだ。

随分長いことここにいたみたいだ。

今何時だろうと思って時計を見ようとすると、視界に入ってきたのは時計でなく見慣れた人影だった。

「お嬢さん、夜にこんなトコにいるなんて危ないですか？なんてな
う。ホント何処行つてたんだよ、探したぞ」

アイツだった。

「私なんか探さず」にむかと帰ればよかつたじやないの・・・」

「お前の家に電話かけたら、おばさんがまだ帰ってないって言つてから心配になつてや」

近頃は物騒なヤツが多いんだ、とかブツクサ言つていたが急にスッと真顔になる。

「じめん」

「何が」

「お前の気持ちにずっと気づけなくて」

「・・・・・」

黙るしかなかつた。

超絶鈍感なアイツが私の気持ちに気づくはずがない、そう考えながらも心の奥底は期待している自分がいた。

「ちょっと喫茶カフェのの人と話してき、その後俺、考えたんだよ」

「」

無い、無い、無い。

期待するな。

期待した分だけ後で失望するだけだ。

自分に何度も言い聞かせるが、期待感はさらにもつっていた。

「今まで俺は迷つてゐるふりをして、結論から逃げてただけなんだと思つ」

私の期待する展開なんてあるわけが無い。
おまえ

「俺はお前が

アイツの真剣なまなざしを見たとき、頭の中がリセットされ、何も考えられなくなつた。

否 逆 た

走馬燈とでも言ひのが、

今までの一人の思い出が頭の中を奔流する。

小さい頃からの10数年が頭の中を駆け巡る。

そしてそれが又まづかさを負ふ。アイソが迷いを表つてゐる。

それでいてゆつくりと口を開く。

「 笹塚さんとじゅなくして、山川さんとのカッティングの方が合つ
と思つんだ！」

翌日、公園に近くの高校に通っている少年が倒れているのを近所の

子供が発見する。

（後書き）

ども、仙人掌です。

予定より恋愛要素的なモノが多めになつてしましましたが、そのまま暴走したまま投稿してみました。

この話の主な登場人物の3人は（店の店員入れて）全員「宝蓮莊の高校生管理人」に出てきます。

番外編っぽいですが、あくまで登場人物をつかつただけの別のお話のようになります。

腐要素を期待した方はスイマセン。

私自身よく知らないので・・・「めんなさい。

そもそも腐男子つているのかなあと、そんなとこから妄想をはじめて書きなぐつたものなので。

読んでくださつた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2199g/>

いつも隣に腐男子

2010年10月14日00時38分発行